

## 受け入れることで大きく成長

米テネシー工科大学・留学記

人文社会科学科 薬師神亮太

「何を見て、何を知っていたのか」最初の1ヶ月間、これが頭から片時も離れることはなかった。何でもやれる気がして「同じ年代では頑張っている方だ」との気負った考えが、その週から完全に消え去った。

留学の動機は、国際化の進む中、英語でコミュニケーションができないと「社会から取り残されるではないか」との漠然とした



懸念だった。7ヶ月以上の米留学から帰国した今、この動機は、あまりに小さく、曖昧模糊としていたと痛感した。留学前の自分は無くなったと感じている。▽ありのまま

最初に、“目”を開けてくれたのは、欧米、中東、アジアの文化の違いだった。それまで日本人の“目”というフィルターを通してでしか世界、そして日本を見ていなかった。自己責任社会の米国の中で、これまでの考え方や知っていたことなどは、あまりに小さく、「一体今まで何をしていたのだろうか」との自己嫌悪さえ感じていた。

これは、何度も襲いかかり、何度も負けそうになった。受け入れることが苦

痛にも似た感覚であった。

だが、常に行動を共にした韓国、アラブの友人、米国のホストファミリー、そしてなにより米国のおかげで、逆に、受け入れられたように思えてきた。

広大な大地、自然、変わりやすい天候が教えてくれたのは、「ありのままがいい」、「気取らなくていい」、「焦らなくていい」というそれまで欠けていた生き方だった。

空港に着いた瞬間に米国は教えてくれた。搭乗した飛行機に荷物が積まれていなかったのである。空港の係員は「後で届ける」という。これには、絶句した。自分の荷物が運ばれていない。届かないことは確かに分かった。それを航空会社は、直接伝えてこないのである。信じられなかった。

日本では、当たり前前のごとが通用しない。あっても守りもしない。到底、考えられなかった。だが、一步下がり冷静に考えてみると、それは別に驚くことではない。米国ではそうなのである。

人種の垣塙の米国は、個人の経験や知識などあまりに小さく、偏ったものでしか過ぎない。「受け入れることで成長すればいい」と教えてくれた。これは、今までにない新しい”目”だった。

▽学びを楽しむ

大学に通い始めて知ったのは、学びを楽しむ”目”だった。それまで、勉強に意欲的ではなかったし、楽しいとも思わなかった。だが、学んだこと



強に意欲的ではなかったし、楽しいとも思わなかった。だが、学んだこと

い専門科目の講義を英語で受けるという“離れ業”に向き合う状況に追い込まれた。

図書館で夜遅くまで毎日、予習や復習しても内容が少ししか頭に入ってこない。授業は語学学校の英語の2倍以上のスピードで進行していく。何度も悪い点数をとり、その度に煩悶する日々が1月半続いた。

しかし、ある専門科目のテストで予期せず良い点を取った時、喜びを感じていた。①問題を読む②内容が理解できる③問題を解ける。このサイクルが楽しかった。「本当は、勉強が好きなんじゃないか」とも考えた。

そう感じる事が不思議に思えた。今までは、ただ知りたくもなかったし、知ろうともしなかったのである。「勉強はつまらない」との偏った考えを持ち、「学びを楽しむ」との”目”を持っていなかったからである。

留学を経て、古い”目”を捨て、新しい”目”を2つ手に入れた。これからまた茨城大学で勉強して、いろいろな経験を積んでいく過程で必要なものでと考えている。

#### ▽試練だった留学

4月から始まる新生活で、何を見て、何を知るだろうか。まだまだ未熟であるが、これからどんな”目”を見つけることができるのだろうか。

留学は、人生の大きな試練となった。“知る”“学ぶ”“理解する”のサイクルが確立され、いままでより、良い私になっていけると信じて、これからも成長していきたい。 (終)

注釈、最初の写真は、語学学校のショット、2番目は自宅の近くの滝で遊ぶ風景

